西欧・東欧見聞録

（ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行）

西欧・東欧見聞録（ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行）

東欧編（ハンガリー・チェコスロバキア・東ドイツ）

程なく 6 人、自己紹介をして英語で会話が弾んだ。それにしてもラテン系の人々は陽気だ。知的なアレックス、黒髪の典型的スペイン美人のエバ、クールなニューヨーカーのリサ、非常に陽気なメキシカンのホセ、そして本間と私。いろいろな話をした。彼らの一番の興味は、日本人が皆、空手の達人なのかということ。丁度、その頃、空手映画や香港製のカンフー映画が特にスペインではやっていたらしく、その影響でそう思い込んでいるらしかった。（このことは、私がスペインを旅行するときに非常に役にたった。）私はそんなことは無いと答えてやった。しかし、ホセが”おれも日本語が話せるよ”というのでしゃべらしてみたら”わざあり””いっぽん”と柔道や空手の判定の用語であり、彼が日本の格闘技に興味を持っているのも事実のようであった。私はフラメンコを観たいと思っていたので、どこが一番よいか聞いて見た。エバとアレックスはバルセロナやマドリッドではなくグラナダやセビーリアのものを見に行くことを勧めてくれた。フラメンコギターの話になり、私はパコ・デ・ルシアも好きで聞いているというと、スペイン人はあまり彼のことを評価していないらしく、むしろアンドリュー・セゴビアとかの方が有名らしかった。

また、来年はバルセロナオリンピックなので、町中建設工事をしていると教えてくれた。バルセロナオリンピックの小旗をくれた。ホセはメキシコは治安が悪い。特にアステカは行かないほうがよい。夜ならば間違いなく強盗に遭い銃口を突きつけられるであろうと話した。スペイン語と日本語の数の数え方を教えあったりブダペストまで盛り上がった。今回の旅行では、彼らをはじめスペイン人やラテン系の人とは非常に相性が良かった気がする。

ウイーン郊外はすぐに牧歌的な風景になり、小一時間程度走ると大平原の中でオーストリア・ハンガリー国境を迎えた。ここで初めて、今までと違った入国管理を経験することになる。いかにも鉄のカーテンをほうふつとさせる国境を越えるとハンガリーの兵士と入国管理官が乗り込んできた。この国境こそが、その 3 ヶ月後の東欧革命において重要な役割を果たそうとは想像もつかなかった。西ドイツへの出国を望む東ドイツ国民がこの国境地帯に終結、それに対してハンガリー政府は国境を開放、堰を切ったように人の流出が始まりそれから怒濤のように革命が進行したのであった。パスポートチェックをする。ハンガリーは東欧の中でももっとも自由化が進んだ国でもあり、いかめしい中にも入国管理官や兵士の態度もフレンドリーであった。私たちも 6 人も仲間がいたので全然緊張しなかった。ホセがまた、持ち前の陽気さで兵士にありがとうとハンガリー語で何というのか聞いていた。我々は、しばらくこの言葉を乱発することになる。

ここからブダペストまではひたすら大平原のなかをひた走る。一面のヒマワリ畑。美しい。スペインもそうなのだろうと聞いたら、スペインはもう盛りが過ぎて、私が行くころにはあまり美しくなくなっているだろうとのことだった。たそがれのハンガリア大平原の中を列車はひた走る。

時々貨物列車とすれ違うが、そのたびに糞尿のにおいが室内に充満する。エバはたまり兼ねて、コンパートメント内に香水を散布しさらに衣服に悪臭がつかないようにと一人ひとりに香水のスプレーを貸してくれる。やがて小高い丘が見えてきたら、だんだん大都会に近づいてきた雰囲気となりやがてブダペスト東駅 Keleti　Palyyaudvar に滑り込んだ。

不思議な響きのハンガリー語のアナウンス、ちょっと暗い駅構内、ヤミ両替のルーマニア人と、ここはまさしく異国。今まで回ってきた国ではあまり感じえなかった、まさに異国の雰囲気であった。本日は、皆で同じところに泊まろうということになり、一緒に宿を探すことになった。ハンガリー通貨のフォリントに両替を済ませ、駅前を歩く。駅で、さらに男一人女 2 人のスペイン人グループと合流した。彼らは、サンセバスチャンから来た兄妹と従姉妹とのことだった。町の雰囲気は西側とは全く異なる。何となく暗いし、走る車もぼろっちい感じ。とにかく中心街の方に向かって歩きながら宿を探すことにしたが見つからない。途中ハンバーガーショップでそれぞれ夕食を買い、立ち食いしながら歩く。

驚いたのはアレックスが私の飲んでいた水を求め、彼の食べていたパンを勧めてきたことだった。最初戸惑ったがありがたく頂いた。驚いたことに皆で回し食い、回し飲みである。私が飲んでいたミネラルウオーターをビンごと、ラッパのみで皆で飲んだ。東欧圏では、ブダペストはドナウの真珠、東欧のパリと言われるだけあって、にぎやかだがどことなく暗い、またなんとなく雑多で西欧の町のような洗練された雰囲気は無かった。しばらく歩いていたが、ホテルが見つからず、今度はホセが公衆電話からあちこちに電話をし出した。あちこち交渉しているようだ。やがてにこにこしながら戻ってきた。全員分宿が取れたとのこと。ホセ大活躍である。皆でバスに乗ってドナウ川を渡って、丘の上のユースホステルに行った。バスの中には兵士がたくさん乗っている。西側とは全く雰囲気が違う。私と本間が一つの部屋。ホセは上手く部屋を取ってくれた。今までとは、全く違う東欧での第一夜が始まった。西欧とは全く雰囲気が異なる。

翌日、朝ユースホステルをチェックアウト、昨日の仲間達と別れた。本日の仕事はまず、共産圏用の学生証を EXPRESSZ で発行してもらうことと、本日の宿を取ることである。バス停で国会議事堂近くの自由広場 Szabadsag ter16 番の EXPRESSZ に行けるバスを教えてもらってそれに乗る。いろいろな人が乗り込むが兵士の数も多い。これは西側の国ではついぞ認められなかったことである。バスはくさり橋で、ドナウ川をわたる。前に座ってる人が”私も日本の横浜に住んでいたことがある。”と日本語で話しかけてきてくれた。そして東駅の近くに日本人がやっているレストランがあることを教えてくれた。

EXPRESSZ で共産圏用の学生証を発行してもらう。ロシア語の記載もあり、いよいよソ連の影響圏内に入ったことが実感された。町の停留所でメトロと市電の一日乗車券を買い、メトロで東駅に向かった。やはり雰囲気が違う。全体的に雑多で汚い感じがした。今度は東駅の IBUSZ（イブス）で今晩の宿を確保した。プライベートルームというまさに個人の家で、安く個人の家を貸してくれるものでブダペストには多い。それは、東駅間近のアパートの一室という感じで、ベルを押すと老女が出てきて部屋を見せてくれた。広い 12 畳ほどの部屋で、ツインベッド、台

所やら全てついている。一泊であること、翌日は夕方遅くに出ていくことも可能か聞いてみる。”No problem！“、これは、これから東欧圏では頻繁に聞く英語の一つになる。ただし、部屋を出るときに鍵をかけることを忘れるなということを念を押された。荷物をおいて先ほど教えてもらった、東駅近くの日本人の店を探しに行ったら見つからず、結局大衆食堂のようなところで食べる。少し薄汚いがやたら滅多と安い。

再び部屋に戻ると、本間はやはりこの東欧圏の空気にあまりなじめない様子で疲れていた。部屋で休みたいとのこと。私は、先ほど手に入れたフリー切符を片手に町に飛び出した。人でごった返すメトロに乗り中心街の方に向かう。ブダペストでは、トロリーバスが走っている。トロリーバスとは架線の下を、ポールから電気を供給されて走る連接バスで、中国や北朝鮮などの映像で良く出てくるいかにも社会主義国といった感じの乗り物である。町々にはなぜか、アメリカ国旗とハンガリー国旗がたくさん掲げてある。（これは、のちにその理由がわかる。）確かに町は、にぎやかで活気がある、だが何となく雑多で、東京の下町の商店街のようである。

（ブダの丘から望むドナウ川と、国会議事堂）

黄色い市電に乗ってブダの丘に行ってみることにする。程なくして、軍服のような制服を着た女車掌が検札をする。何となく緊張したが、どうということはなかった。市電はマルギット橋でドナウ川を渡る。ドナウ左岸に国会議事堂の美しい姿が見える。モスクワ広場で降りて坂道を上ると漁夫の砦のある高台に至る。このころには曇り空がきれいに晴れて、ブダペストのすばらしい景色が現れた。ドナウ川とブダペストの町のすばらしい眺め。今まで、見た景色の中でも忘れられないものの一つである。ブダペストがドナウの真珠と云われるのも納得できる。夜景を見れたら、まさに真珠のようなのだろうがそれはできなかった。ここにはヒルトンホテルもあり、外

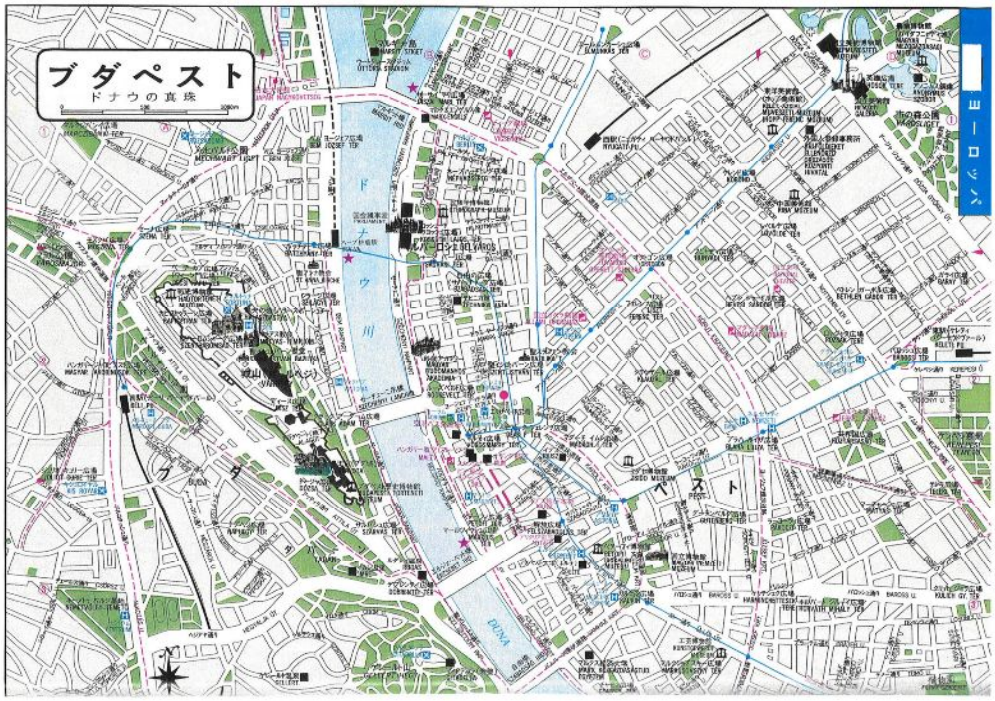
国人観光客も多い。大道芸人もいて、バイオリンで例のハンガリアン舞曲をひいている。さらにここからドナウやブダペストのすばらしい眺めを見ながら、ブダの王宮へ。ここブダの丘は、最後までドイツ軍が陣取り、ペスト側のソ連軍と撃ち合ったところだそうだ。くさり橋に向かって降りていく途中にナショナルギャラリーがあり、ムンカーチ、ミハーイなどのハンガリーを代表する画家の絵を見たがさっぱりわからなかった。ちなみに学生証を見せたら入場料はただだった。

ここのカフェテリアで休んでいると、日本人のおじさんが話しかけてきた。満面に笑みを浮かべて”やあやあ、これはなつかしい、日本の方ですね。”” このジーンズはすばらしい、やはり生地がいいですね。”と一方的に話しかける。私は、これは詐欺かなんかに違いないと最初警戒したが、話しているうちに、本当に日本人が懐かしいのだとわかったし、なかなかの人物であることもわかった。彼は合衆国で歯科医を営み、ABC テレビにも出たことがあるらしく写真もみせてくれた。タイから、陸路でしかも貧乏旅行でインド、パキスタン、イラン、トルコ、キプロス、ギリシャなどを経て、ようやくこのブダペストにたどりついたとのこと。やはり日本人が少ない東欧でありとてもうれしかったらしい。いろいろとおもしろい話を教えてくれた。”今日この町にだれが来ているかしっていますか？”” いえ”” ジョージ・ブッシュが来てるんですよ。あのアメリカ大統領が”” へえ、そうなんですか。なるほどそれで街に星条旗があふれていたんだ。”---これがのちの東欧革命の前兆であることなど知る由もなかった。イランはイスラム原理主義の戒律が厳しくて、本当に緊張した。出入国は非常に厳しかったが、”おしん”のことを話すと結構簡単に通してくれたことを話してくれた。”おしん”とは、その数年前に人気のあったＮＨＫの連続テレビ小説で、ヤオハンの会長がモデルになった、少女が苦労しながら成長し世界の大スーパーの経営者になっていく物である。イランではなぜか家庭用ビデオの普及率が良く、またなぜかこの”おしん”というドラマの吹き替え版が非常に人気があるらしかった。トルコに入国したら、緊張がとれて本当に生きた心地がしたことなど、いろいろと楽しい話をしてくれた。”いやあ、久しぶりに楽しいひとときを過ごしました。良いご旅行を！”といって去っていった。私にとっても非常に楽しいひとときであった。再び、ドナウを渡りペストの街へ、メトロにのって宿に戻る。本間は寝ていたが、起きると入れ違いに部屋を出ていって、街の散歩に出かけた。しかし何となく機嫌が悪い。もともと東欧にくることには乗り気でなかったのだ。ストレスがたまったのであろう。夜、彼が帰ってきてから今後の予定を話した。私は予定通り、チェコスロバキアを経てベルリンに行くことに、本間は翌日早くオーストリアに戻ることになった。

（ブダの丘から、ドナウ川と“くさり橋”）

翌朝、本間を東駅に見送り、私は東駅の IBUSZ でベルリンまでの切符を買うことにした。行ってみるとそこは長蛇の列。皆、東ドイツ国民のようだ。東ドイツ国民は東欧圏内の旅行は許されているとのことで、東欧圏内にあって比較的自由なハンガリーは人気が高く、バラトン湖というリゾート地への旅行者が多いと聞いたことがある。

ようやく自分の番になる。ハンガリーをはじめ、東欧圏は英語よりもドイツ語の方が良く通じるとのことなのでドイツ語で用を足す。”ベルリンまでのクシェット
ありますか？”” ないよ”” じゃ、寝台ありますか？”” あるよ” 切符は午後 4 時にできるからその時とりにきてくれとのこと。仕方がないから、観光をすることにした。いよいよ、ここからは全くの一人旅である。しかも日本人の少ない東欧圏で--何となく心細くなった。とりあえずメトロで自由広場へ。ここはメトロの十字路であり何度も利用することになる。乗り換えて英雄広場に行く。これも観光のモニュメントなのだが、なぜか薄寂しい。考えてみれば、いままで一緒にいた本間と、昨日あった人以外、日本人には全く会っていない。



英雄広場からアンドラーシ通り（別名：人民共和国通り）というブダペストのシャンゼリゼといわれる通りを歩く。確かに東駅前のラーコーツィ通りと比べると洗練されてはいるが、西側の国の通りと比べるとまだまだあか抜けない。途中本屋に立ち寄りブダペスト市街のポケットアトラスを買う。日本人はやはり珍しいと見えて、レジの娘さんの笑顔の裏にも好奇のいろが伺える。ひととおり散策した後、東駅に戻る。立ち食いのスタンドでジュースを買い休む。私がドイツ語で用を足すためか、皆”あなたはドイツ人か？”と聞いてくる。このあたりで欧米諸国と日本の感覚の違いを痛感した。日本人は単一民族だから、肌の色が異なり、顔つきが異なれば日本人ではないいわば”外人さん”ということになってしまいそうだが、欧米では肌の色、顔つきがいくら違っていてもドイツ国籍があればドイツ人、フランス国籍を持っていればフランス人なのであろう。これこそまさにコスモポリタンな感覚というものなのであろう。

駅前のストアーでパンやらジュースやらを買って部屋で食べた。やたら安かった。
確かに共産圏内の国であっても、比較的豊かなのであろうかモスクワの空港でのレストランの品揃えなどから見ると、物資は豊かに市場に出回っていると感じた。町を走る車はおそらく東独製なのであろう。トラバントやそれに似た車が大多数である。車体は、紙に強化プラスチック塗装をしたものや木でできているそうだ。そんな中で、日本製のセリカが走っていて、おそらく政府高官のどら息子が乗り回しているのだろうと思った。本日は曇り、一人っきりになったし何となくもの悲しい。

遠くに病院が見え、救急車の音が聞こえる。昼寝をして 16 時になったときに、東駅の IBUSZ に切符を取りに行った。ブダペスト-ベルリンの片道 2 等切符とプラハまでの寝台券。あわせて

300 フォリント、なんと日本円で 700 円程度。私は我が目を疑った。やはり共産圏は物価が安いのだ。本日 23：30 ブダペスト西駅発のパンノニア急行でプラハ着 9：41 であった。ちなみにハンガリー語で駅はパーヤードヴアールというらしい。東がケレチで西がニュガティである。発車が夜中なので、宿のおばさんがくるまで休ませてもらおう。ベッドに横になり、今後の経路を考える。一人きりになり、本日、日本人に全く会わなかったことなどを考えると共産圏に行くのもかなり不安な気がする。オーストリアに戻ってしまうのは簡単だ。しかし、百塔の街といわれるプラハも見ておきたい。もうサイは投げられた。予定通り、ブダペスト-プラハ-ベルリンの経路を行こう。ベルリンからは、ベルリンに着いてから考えよう。

夕方、7 時頃、老婆とその娘さんか嫁さんかわからないがやってきた。さよならとお礼を言った。娘さんが、ビワのような果物をたくさんくれた。私は、お礼にするものがなかったので、持ってきていた農協ご飯のレトルトパックを差し上げた。

メトロに乗り、自由広場駅で乗り換えて西駅に。西駅は全面ガラス張りという感じで、重厚な東駅とは雰囲気が全く異なる。後日、西駅を設計したのはあのエッフェルであることを知るが、なるほどと納得した。西駅の食堂で夕食をとる。ここでもドイツ人かと聞かれた。共産圏だから犯罪は少ないと聞いていたものの何となく不安。駅のベンチで列車の入線を待つ。駅の雰囲気も、待つ人々も雰囲気が西側とは全く異なる。人はたくさんいるが誰もが無口である。やがて 23：00 頃、ゆっくりとパンノニア急行が入線してきた。戦争映画で見たような重々しい入線の仕方である。車両はみな古い。自分の部屋番号をみつけて入り込むが、中にはまだ誰もいない。3 人部屋であった。同室者が変な人間でなければ良いがと思っていたが、結局プラハまで誰も乗ってこず、私一人の個室状態であった。

23：30 何の前触れもなく静かに列車はホームを滑る出す。ブダペストの街の明かりが徐々に車窓から遠ざかる。これからいよいよディープな共産圏である。期待と不安。どちらかというと不安のほうが大きかった。1 時間も走った頃か、スチュロボという国境駅（ブダペストから約 80ｋｍ）のようだ。ドアをノックする音、遠慮というものが全くない。ドアを開けると、軍服のような制服を着たチェコの入国管理官の男 2 人と女 1 人であった。威圧的に”パスポート、プリーズ！”情け容赦ないという感じである。パスポートとビザを見せる。実は日本で手に入れたチェコのビザには本籍が間違って YAMAGATA と記されており、パスポートと食い違っているので、これが指摘されたらなんといおうかと思っていたが、ばれなかった。”カメラ？”ときかれ銘柄をきかれた。”ニコン””ヤー”、別の係員が”アイネ・ニコン”と記す。その後はぶっきらぼうに挨拶もせずにドアをしめ行ってしまった。ますます不安が広がる。これが共産圏なんだ。まあ何とかなるだろう。じっくり共産圏というものを味わってやろうじゃないかと、腹を据えると、深いねむりに入った。

目を覚ますと、朝靄の中を列車が走る。7：00 頃である。ブラチスラバは 3：44 ブルノは 5：57 発だから、今はプラハの 200ｋｍほど手前を走っているようだ。外は田園風景と森が交互に現れる。所々に民家が見え隠れする。窓が汚いのでよく見えないが、曇り空のボヘミア平原を

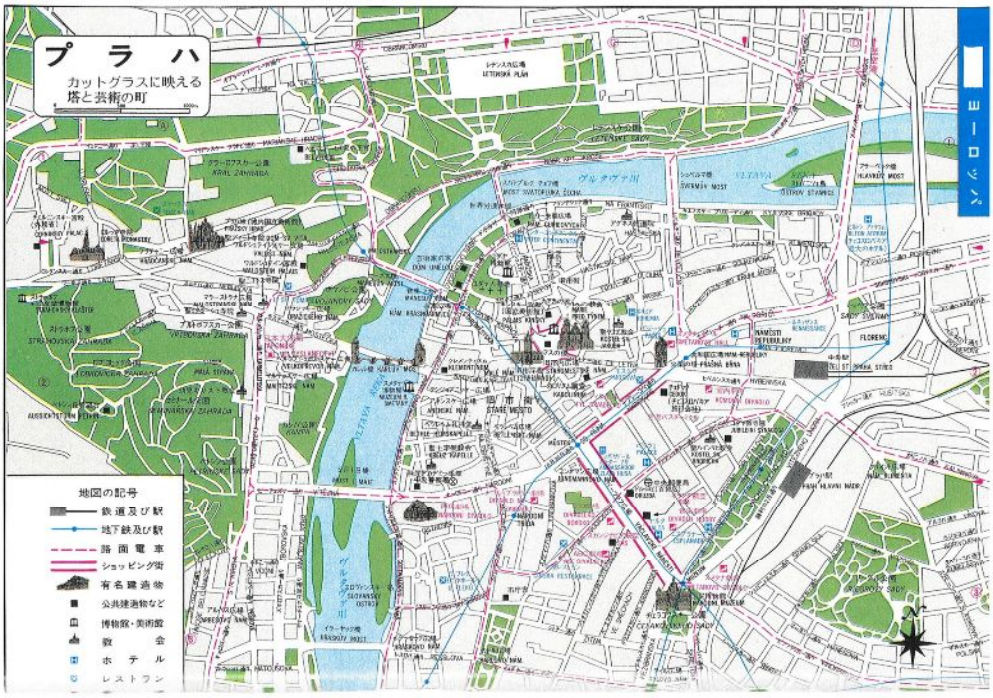
列車はひた走る。プラハは今回の旅行では、常に興味を奪ってやまない街だったので期待もあるが、共産圏のまっただ中ということもあり、単身乗り込むことに非常に不安があった。やがて、周囲が街らしくなってきたかと思うとプラハだ。9：00 過ぎプラハ Holesovice 駅に到着した。時刻表では町中のプラハ本駅(Praha Hlavininadrazi)に到着すると書いてあったのに、町はずれの駅に着かれてしまって困ってしまった。両替もない。中心街までは地下鉄があるようだが切符が買えない。何とも寒々しいプラハの一日の幕開けであった。

優しそうな婦人がいたので話しかけた。”中心街に行きたいのですが、全くコルナがありません。（コルナはチェコの通貨）”婦人は私に自分の回数券から一枚とって私にくれた。一緒に地下鉄に乗って、私はガイドブックのチェコの写真を見せた。何かお礼をしなければと思ったが、チェコでは外国人との闇両替をした市民はかなり厳しく罰せられると聞いていたので、この婦人が変な疑いをもたれても困るなと思うと何もあげれなかった。結局丁重にお礼を言ってわかれた。ムステークという名の、市の中心地と思われる駅でおり地上に出てみた。プラハの地下鉄は、ブダペストのものに比べると格段にきれいであった。駅も何となくこぎれいであった。ただ何となく全体的に冷たい感じがした。

地上に出て見回すと、変なおじさんが近寄ってきた。警戒しながら話を聞くと、私のうちに泊まらないかという。日本人が書いた推薦状も見せてくれた。ぼろぼろになったその紙には”このおじさんのいうことは信用しても良いです。宿もよかったし安心してとまれます。”と、確かに日本人の署名入りで書いてあった。結局一晩 8 ドルで泊めてもらうことにした。そうと決まると話ははやい。おじさんは、私にさっきおばさんがくれたのと同じ地下鉄の回数券をくれて、一緒に地下鉄に乗った。ソコロフスカという駅で降り、しばらく路地を歩いておじさんの家につれて行ってくれた。家に入るとまさにチェコスロバキア市民の家であった。その中の一室をわたしに貸してくれた。コーヒーを出してくれたが、今まで飲んだことのないようなもので、そこにコーヒーのかすがたくさん沈んでいる。後に、これがトルコ風コーヒーなのだということがわかった。息子のヤルダを紹介してくれた。おじさんに、プラハにきたんだからピルゼンビールを飲みたいといったらプラズドロイという銘柄を紹介してくれた。私は、ピルスナーウルケレを期待していたのだが、一般の人にはそちらの方が人気があるのであろう。おじさんがいろいろと話をしてくれた。私がドイツ語も少しわかることがわかると、ドイツ語でしゃべりだした。やはり、英語よりもドイツ語が通じるのだ。なにやら闇両替には気をつけろといっているようであった。両替をしなければならないというと、ナプシコーペ通りのチェドック（国営旅行社）に行けと教えてくれた。地下鉄の回数券をまた一枚くれた。

私は、再び地下鉄に乗ってムステークに行って、プラハ一の繁華街といわれるナプシコーペ通りを散策した。プラハの街は美しかった。こぎれいである。時々”change money”と行って来る人がいるが、ブダペストのようにおおっぴらでなくこそこそやってくる。やはり闇両替の取り締まりが厳しいのであろう。チェドックで 40US$の強制両替をした。またチェコでは個人の家に泊まるときには警察に届け出なければならないと書いてあったが、一晩だけならその必要はないといわれた.なかなか愛想の良い、かわいい娘さん 2 人で、緊張していた私の心も非常にほぐ

れた。プラハの地図をもらう。



本日、とにかくいっぱい見て回り、足りなかったらもう少し長く滞在しようと考え、とりあえず明日の列車の座席指定だけとっておこうと思った。別の窓口に並ぶ。9：50 発の、プラハまで乗ってきた同じパンノニア急行のプラハからベルリンまでの指定席、52 号車 19 番。やはり非常に安かった。並んでいるとき、クエートからきているというアディフとその連れが話しかけてきた。しばらく話をしたら”じゃあ”といっていなくなってしまった。いったい何だったんだろう。かれらはプラハに何をしにきているんだろう。それは聞けなかった。かれらの祖国は後に、イラクに侵略され、湾岸戦争という全世界を巻き込む戦乱のまっただ中になるのだが、そのときはそんなことなど予想もつくわけもなかった。

私は非常に気分がほぐれ街の散策を始めた。火薬の塔、有名な 12 使徒時計（旧市庁舎の天文時計）を見に行く。さすがにここは観光客が多いが日本人は誰もいない。近くのカフェテラスでコーヒーを一服。やはり、プラハにきて良かった。ここでついでに東ドイツ(DDR)のビザをとっておこうと思いつき、通行人に東ドイツ大使館の位置を聞いて、教えられたとおりに歩くが、全く見つからない。地図をよく見てみると教えられた場所と全く異なるところにあるようだ。これはプラハ市民の人が悪いか、あるいは DDR が嫌われており、そこに用事のある人間だから意地悪されたのかどちらかであろうが、おそらくは後者であろう。

有名なカレル橋、ブルタヴァ川、プラハ城を見ながら川沿いの道を歩く。おもわず、スメタナのモルダウを口ずさんでしまう。国民劇場の建物を見ながら歩くと、DDR 大使館だ。ここに至るまでにプラハの市内を走る車が非常に少ないことに気がついた。車はやはり、東独製のトラバ

ントかそれに類するもの。信号機も少なく、交通整理の警察官がたっている。写真を撮ったらおこられるかと思ったが何もいわれなかった。赤と色のツートンの市電がくすんだ中世のような街を走っている。なんとエキゾチックでノスタルジックな風景なのであろう。写真を撮りまくったが注意もされなかった。（残念ながら、プラハ〜ベルリン〜コペンハーゲンでとったフィルムはマドリッドの写真屋で現像が失敗されてしまい日の目を見なかった。）

東ドイツ大使館は、非常にいやな感じであった。私がよばれて中に入るといきなり自動ロックがかけられた。”明日、西ベルリンに行くのだが、（私は西を強調した。）東ドイツ領内を通過するのにビザは必要か？”” 必要ありません”なーんだ、なんということはなく用は足りてしまったが、東側の国家の嫌らしさを垣間見た気分であり後味が悪かった。

再び、ナプシコーペ通りに戻るのだが、途中の町々の美しさは息をのむようであった。バーツラフ通りを国民博物館に向かって歩く。ばかでかい公園のような通りである。3ヶ月後に、ここが東欧革命の重要な舞台になることなど全く伺いしれない。ここでもカフェテラスに入ってコーヒーを飲む。プラハはとても静かで落ち着いた街である。何となく寂しい気もするが、私はとても気に入った。非常に気分も落ち着いた。再び、ナプシコーペ通りに戻ると小雨が降り出した。かさがほしくなり通行人に、近くにデパートはないですかとドイツ語で聞いたら、やはりきれいなドイツ語で”カトバ”というデパートを教えてくれた。行ってみるとやはりものが少ない。共産圏のデパートはこんなものかと、最上階から下までじっくり観察した。

結局傘は買わなかったが、店を出る頃には雨はやんでいた。しかも日が射してきている。ナプシコーペ通りの本屋に入って、プラハのきれいな地図を買う。そういえば、両替したお金はまだかなり残っている。昼飯はどうしようかと思い、両替したコルナを数えてみると物価を考えると大金である。出国の時にどうせ持ち出せないのだから、ある程度だけのこして使ってしまえとばかりに、通りのレストランに入ってコース料理を頼んだ。もちろんピルゼンビールももらう。ピルスナーウルケレであった。支払いはカードか US$か、コルナかと聞かれコルナと答えたらがっかりされた。やはり、外貨がほしいのであろう。クネードリキというチェコの料理も出た。ビールとワインで心地よくなり、今度はプラハ城に行くことにした。カレル橋を歩きモルダウを口ずさむ。橋を渡ってフラチャニーの丘を登り、そこのバルコニーからは百塔の街や、ブルタヴァ川が一望の下である。ついでプラハ城内を散策し、黄金小路という美しい通りを下って橋のたもとの地下鉄の駅へ。途中、公衆便所に入るが、ここでは掃除のおばさんが常勤していて、用を足した後チップを払うのだがそのためか非常に清潔であった。

地下鉄で再びムステークに行く。この駅はもう何度も利用している。外に出たところで一人の若者が英語で話しかけてきた。”プラハはどうですか？”” とても美しい、すばらしい街ですね。”” わたしもそう思います。私はカレル大学の学生ですが、あなたは日本人ですか。””そうですけど”” 日本の女性はすばらしいと聞いてます。是非文通したいので紹介してください。”” いいですよ。” 彼は、私に名前と住所の書いたメモをくれた。再びナプシコーペ通りに戻る。プラハはそんなに大きい街ではない。もう見るところは見てしまった気がしたので、あすは予定通りベルリンに旅立つことにした。地下鉄で宿に戻る。

ソコロフスカの駅から、おじさんの家に。おじさんはとても暖かく迎えてくれる。
部屋に入って休んでいると、ヤルダが例のコーヒーを持ってきてくれた。彼はチェコ語しか話せないようだが、なにやら身振り手振りで”しばらくしたら飲みに行かないか”といっているようだ。”OK”しばらく休んだ後、ヤルダが呼びに来てくれて夜のプラハにつれていってくれた。私はもうこの人たちを信用している。プラハの街はすばらしい。鉄道の高架ををわたって酒場に入っていった。中にはヤルダのような青年や労働者風情の人がいっぱいいた。ヤルダと席に着くと仲間がたくさんやってきた。プラズドロイで乾杯だ。仲間の中で英語ができる人が通訳をして話が弾む。やはり日本人はかなりめずらしいようで、みな私に注目している。ビールがおいしく気持ちよい。私は、かれらが喜ぶと思ってチェコ人で有名なテニスプレイヤーのイワン・レンドルやマルチナ・ナブラチロアの名を出したが、彼らにしてみれば祖国を捨てた人々であり、あまり好んではいないようであった。そのほか、何の話をしたか忘れたがとにかく楽しかった。便所に行くと、他の客が珍しそうに注目する。”ヤポンスキー！ヤポンスキー！”という声が聞こえる。私は異国の地でこれだけ歓迎されるとは思ってもいなかったので非常に気分が良かった。したたかに飲んで帰ったが、すべてヤルダがおごってくれた。

家に帰ってからも、ヤルダがもっと飲もうという。これからの会話はすべて、身振り手振りと、絵を描いての会話である。チェコ語の全くわからない男と、チェコ語しか話せない男との会話である。彼は25歳とのこと。いろいろなことを話した？”日本ではテレビが何局ある？チェコでは2つだ。””日本では6局だよ”くやしがるヤルダ。窓の外を時々、ベルリンかモスクワに向かうであろう列車が通る。”チェコの人もスキーをするの？””チェコでもスキーはするよ。このソ連国境に近いスロバキアではね”といった感じ、内容は自分ではこういう会話だったつもりだが、とにかく午前3時くらいまで会話が弾んだ。私は、眠りたいとジェスチャーでいうと、”グッドバイ”をして彼も、自分の部屋に戻った。トイレはどこかと聞くと玄関の外とのこと。鍵をあけ共同トイレで用を足す。まさにプラハの一般市民の家である。すぐに良い気分で眠りに入る。

私は、翌日非常にうれしくて何かお礼ができないかと考えた。そうだ、あのおじさんがもっとも喜ぶものといったら、新しい日本人向けの推薦状ではないか。私は丁寧に、日本語でこの宿のすばらしさをしたためおじさんに”エムフェーロング！：ドイツ語で推薦状)”といって渡した。おじさんはとても喜んでくれた。そしてヤルダとおじさんに、とりあえず農協ご飯レトルトパックを渡したらこれも非常に喜んでくれた。

朝いただいたコーヒーが非常においしい。おじさんとヤルダと別れて地下鉄駅ソコロフスカに行く。ホームでかわいい女の子がほほえみかけてきた。会話をしたいのだがなんといって良いのかわからないようであった。”わたしは日本人で、これからベルリンに行くんだよ。プラハはとても美しくてすばらしい街だね”といって、エバからもらったバルセロナオリンピックの小旗をあげたらとても喜んでくれた。

プラハ、ホレショビス駅、パンノニア急行の席につく。それにしてもどうして共産圏の列車はどうしてくすんだ色合いに塗装するんだろう。もっと明るい色にすればと思うのだが。自分の席につきプラハのすばらしかった思い出を反芻し、これからの道中に思いをはせた。やがてコンパ

ートメントに技術者らしい人々が乗り込んできていっぱいになってしまった。定刻になり、パンノニア急行は静かにプラハを後にした。曇天のボヘミア盆地。いかにも社会主義国の空の色という感じ。これからもっと、ディープな共産国、東ドイツである。

単調なボヘミア平原を列車は北上する。デーシンという国境駅に着く。チェコの係官がパスポートとビザをチェックする。私だけ、コンパートメントから出されて、車掌室で昨日どこに泊まったか聞かれた。仕方がないのでプリバート・チムマー（個人宅）といい、ヤルダの家の住所を教えた。いろいろチェックしていたが解放してくれた。私は、住所を教えたのはまずかったかなと一瞬思ったが、こういうことで住所を告げられて困るようなら、最初から住所は教えないだろうと思い安心した。コンパートメントに戻ると、同室の東ドイツの技術者たちがひどい扱いだ、きっと君のその赤いパスポートのためだと同情してくれた。それがきっかけで会話が始まった。

しばらく行くと東ドイツ側の国境駅バッド・シュビンメン。入国は比較的簡単である。列車はエルベ川を右に見ながら北上する。エルベ川の向こうの山々がエルツ山脈であることを一番上と思われる人が教えてくれる。一番若そうな青年とはいろいろ話した。彼の友人にドレスデン交響楽団のチェロリストがいて、東京に行ったことがあるらしいが、すばらしい街だと語っていたこと。私は、東京はいつも人で混み合っていて落ち着かないよと話した。音楽はブラームスが好きなこと。ドレスデン交響楽団の指揮者は日本人のワカスギ氏でこれもまたすばらしいのだという。私は東側の人々にとっての娯楽はクラシック音楽を聴くことなのだと、しみじみ感じながら、ブラームスの交響曲第一番の第 4 楽章の重厚なフレーズを思い出していた。（サントリーの”響”というウイスキーのコマーシャルに使われたことがある。）もっとも、その旋律を聴くまでには退屈な 1～3 楽章を聞かなくてはならないのだが。

外は晴れていて気持ちがよい。ドイツ人にとってライン川は”母なる川”そして、エルベ川は”父なる川”といわれる。ずっと下流には、ヨーロッパ 3 大貿易港の一つハンブルグがある。この青年、後に彼からの手紙で、国立科学アカデミーのマルコ・ステファン博士だとわかるのだが、日本にはかなりよい印象を持っているようだ。また、第二次大戦中に同盟国であったことなども、親近感を与えることになっているのであろう。わたしはいつか日本にきてくださいといった。青年は苦笑いをした。かわりに年輩の人が優しく”We can't go forever：私たちは永久に行くことはできないのです。”と答えてくれた。私はしまったと思った。この人たちは自由に旅行などできないのであった。罪なことを聞いてしまったと思った。気まずい雰囲気になるかと思いきや、すぐに別の話題で盛り上がった。マイセンの陶磁器の話などをした。

国境から 30ｋｍほどで彼らの降りる駅ドレスデンだ。かつてはエルベ川のフィレンツエと、その美しさを歌われた、ザクセン王国の首都として栄えた街だが 1945 年、2 月 13 日米英空軍の猛爆撃で街は一夜にして灰燼に帰してしまった。有名なツビンガー宮殿などは復元されているとのことだ。中央駅に近づくにつれて街らしくはなってきたが、どこかくすんでいて寒々しかった。また、曇り空もその雰囲気作りに一役買った。中央駅でかれらと別れた。黒っぽく灰色の街が横たわっている。そこにおもちゃのような赤と白のツートンの市電が走っているのが見える。今度は、また、たくさんの人が乗ってきた。たちまち満席になる。若者ばかり、みな年代物のよ

うなジーンズをはいている。中央駅を出ると次は、ノイシュタット駅。コンパートメントの同室者には恋人同士もいてそれぞれは会話しているのだが、私に対するまなざしには、どこか憎しみがこもっているようでやりきれなかった。ここからベルリンまではほぼ 160ｋｍ。途中、さほど大きな街はない。車窓から見る東ドイツの景色は何となく寒々しい。時々、水色のトラバントが見える。同室の人とは、とても会話する気になれない。曇り時々雨。沈鬱な風景だ。やがて、外の景色が少しずつ街らしくなってきた。空も、時々太陽が顔を出す。

ベージュとチョコレート色のツートンの国電らしき電車が見える。第 3 軌条式らしく架線がない。日本の地下鉄銀座線や丸の内線のようなものだ。やがて、シェーネフェルトの駅名標が見える。東ベルリンの国際空港のあるところだ。西ベルリンには有名な、テンペルホフ空港とテーゲル空港がある。いよいよベルリン市街である。大都市ではあるようだがなぜか寒々しい。そうこうするうちに終点のリヒテンベルグ駅に着いた。

とりあえず、ここで東ドイツマルクへの両替をする。細かい金がないので駅前の食料品店に入った。びっくりした。入るのが順番である。店内にならぶ品はやはり少ない。とりあえずチョコレートを一つ買った。店員は全く愛想がない。これが社会主義なのだ。サービス精神もへったくれもない。S-Bahn（Ｓバーン：国電）の切符を買う。なんと厚紙そのものに印字しただけの安上がりな切符であった。リヒテンベルグ駅から先ほど見た、国電に乗る。ベルリン中央駅、ベルリン東駅、ヤンノビッツブリュックと過ぎ、徐々に大都市らしさが見えてくる。ねぎ坊主とあだ名されるテレビ塔が間近に見えてくると、アレクサンダープラッツ、ここが東ベルリン一の繁華街らしく、人がたくさん降りたし、街の様子もにぎやかである。しかし、心なしか寒々しい。ついでマルクスエンゲルスプラッツ、いかにも社会主義国の駅名である。ペルガモン美術館、フンボルト大学のそばを通って、終点のフリードリッヒシュトラーセ駅である。ここが西ベルリンに抜ける関門である。外国人はこの駅をとおるか、チャーリー検問所（チェックポイントチャーリー）を通って西ベルリンに抜けることになる。東ドイツ国民はもちろん行けない。

駅をいったん出て街に出る。やはり車はトラバント。にぎやかだが、人々に笑顔が見られない。フリードリッヒシュトラーセ駅の横の、体育館のような建物から中に入る。たくさんの人だ。窓口に緊張して並んでいたが、比較的楽に通過でき、ホームに出ることができた。ホームはもう西ベルリンのようなものである。そばにいたおじさんが話しかけてくる。ギリシャのテキサロケから来たという画家のおじさんだった。ドイツ語で話す。つたないドイツ語で申し訳ないといったら、いいやちゃんとわかるよといってくれたのでうれしかった。

ホームに列車が入線してきた。Ｓバーンで、先ほどまでのと同じ物で色が黄色と赤のツートンであった。なるほど、西ベルリン市内の鉄道はＳバーンも、Ｕバーン（地下鉄）もＤＲ（東ドイツ国鉄）が管理していると聞いたことがあるが、どうやら本当のようだ。静かに列車が発車する。ゆっくりとシュプレー川沿いの壁にそって走る。まもなく壁を抜ける。やった西ベルリンだ。この瞬間、やっと自由を得た東ドイツ市民になったような感覚にとらわれる。ティアガルテンという駅を過ぎ、次は、西ベルリンの中心駅ツオーロギシャーガルテン駅（動物園駅、略して Zoo 駅と云われる。）だ。非常に近代的な明るい駅で、再び西側に戻ったことにいささかの喜びを感

じた。

徐々に暗くなってきたのでインフォメーションを探したが見つからない。通行人につれていってもらった。ウイルマースドルファー通りにある安ホテルだが、どういったらよいのかわからない。バスの運転手に聞いてみたら、”このバスで行けるよ。ここに座ってな”と運転席の近くの席を示した。西ベルリンのバスは黄色い二階建てバスである。

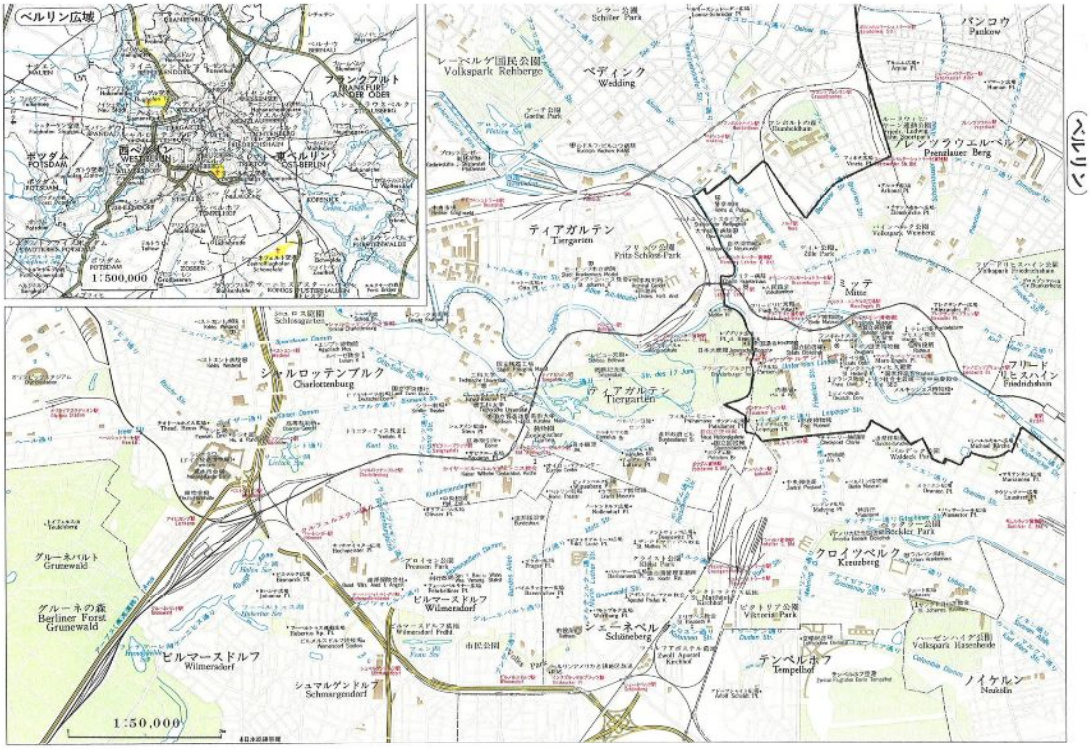
西ベルリンは、東ベルリンとは全く異なり底抜けに明るい。壁一つ隔ててこうも違うものかと関心もした。西ドイツ一の都会でありながら、陸の孤島であり、実質上、米英仏 3 カ国連合統治の不思議な立場の街の繁栄を眺めた。4-5 カ所停留所をすぎたところで、運転手が教えてくれた。ダンケシェーン、アウフビーダーゼーエンといってわかれた。安ホテルだが清潔であり安心した。チェックインし荷物を降ろすと、再び街に出た。久しぶりの西側の都市。明るくにぎやかで洗練されている。うれしくなった。いっぱい食べ物や、ビール、ジュースなどを買い込んで、ゆっくり部屋で食べることにした。窓からはベルリンの町並みと、時々Ｓバーンが走るのが見える。何とも不思議な大都会である。明日は西ベルリンをゆっくり見た後で、コペンハーゲンに向かうことにする。

翌日は、曇り時々晴れ。チェックアウトの後、バスで Zoo 駅に行く。トランスアルピーノを見つけ、ベルリンからデンマークの国境駅:ゲッサーまでの切符を買う。もちろん東ドイツの港、バルネミュンデからゲッサーまではバルト海のフェリーである。ついでベルリンの一日切符を買う。まずは、何をおいてもチェックポイント・チャーリーを見たい。Uバーンで向かう。英米仏の国旗が掲げられ、連合軍兵士が駐屯する。まだ、ここは戦争が終わっていない。まだ西ベルリンは連合国の、そして東ベルリンはソ連の占領地なのである。近くの”ベルリンの壁記念館”に入って見学する。何とも悲しい展示物である。ここのカフェテリアで昼食をとっていると、若者が相席してもいいかと聞いてきた。彼はノルウェイ人で、オスロからここまでオートバイでやってきたらしい。なんとも大胆なことをするものである。途中東ドイツ領内は大丈夫だったのか聞いてみたが、特に問題はなかったらしい。それはすごいと感心していたら、彼は私が日本から飛行機で 14 時間もかけてヨーロッパに来ていることにびっくりし、日本人はそれだけのお金の余裕があるんだから、やはり金持ちなんだと感心していた。楽しい会話の後、お互いの旅を祝福して別れた。

（左：プラハで飲んだビールのラベル、右：東ドイツ５マルク紙幣など）

ここからは、天気も良くなってきたことだしベルリンの壁づたいに歩いてみることにした。有名な落書きがある。ブランデンブルク門のところには大道芸人もいる。そこから帝国議会議事堂をすぎてシュプレー川沿いに歩くと、花を掲げた十字架がいくつもあった。壁を越えようとして銃殺された東ドイツ市民の冥福を祈るための物らしい。再びヨーロッパセンターのあるところに戻る。有名なヴィルヘルム皇帝記念教会が見える。虫歯というあだなのあるその廃墟は、大戦の際の廃墟をそのままに残してある物である。その通りは西ベルリン一の繁華街クーアフュルシュテンダム（クーダム）通りである。今までの東側の街からすると、全く異なる洗練された町並みである。道にはベンツや BMW があふれている。ヨーロッパセンター内のデパートに入ってみる。何と豊かな商品の数々。東ベルリンの人々は、壁一つ隔てたこの豊かさは知っているのであろうか。西ドイツのテレビ放送は、東ドイツでも入ってしまうとのことだから、東ドイツ政府がいかに西ドイツは貧乏にみまわれているといっても誰も信じないであろう。

久しぶりに日本料理を食べたくなったが高そうなのでやめた。本日夜 22:00 発のオストゼー・エクスプレス、コペンハーゲン行きに乗るので時間がたっぷりある。Ｓバーンをいろいろ乗ってみる。西ベルリンも南の方は森や林がたくさんあり緑が多いことがわかる。さらにUバーンで一部、東ベルリン領内を通過する区間があるのでどうなっているか乗ってみた。ウンテルデンリンデンは駅名は見えたが、ホームは使われておらず通過であった。フリードリッヒシュトラーセ駅で乗り換えし、昨日と同じ経路で Zoo 駅に。やはりフリードリッヒシュトラーセ駅のホームは、東ベルリンにあっても西ベルリンなのである。



Zoo 駅のレストランで夕食をとった。ベルリナービールを飲んでほろよいに。そろそろ時間なのでホームに入る。コペンハーゲン行きのオストゼーエクスプレスとスウェーデンのマルメ行きの列車が入線していた。駅員はＤＲ職員のようで非常に愛想が悪い。コペンハーゲン行きはどちらかと聞くと、ひげの大男はにこりともせず車両を指さしただけであった。コンパートメントに乗り込んで発車を待つ。今のところ私一人だ。これはゆっくりできるかも。

定刻に発車、と同時に東ドイツの入国管理官がコンパートメントにやってきた。彼は珍しく愛想が良く、日本語で”切符ください。”といい、切符とパスポートをチェックするとにっこり”ありがとう。”と云ってくれた。うれしかった。東ドイツの役人にもこんな人がいるんだなとほっとした。

壁を越え、フリードリッヒシュトラーセ駅に止まる、次はベルリン中央駅。西側の旅行者と思われる若い男女と、変なむっつりとしたおじさんが乗り込んできた。誰も挨拶しない。やはり、東側に入ると誰もが気詰まりになってしまうのであろう。リヒテンベルグ駅を出ると、街の灯も少なくなりはじめ、闇の東ドイツ領内を列車は北上する。誰もしゃべらない。若いカップルも黙ったままだ。私は眠るのがもったいないので、ずっと起きて車窓を眺めている。

ロストクをすぎると、いよいよ東ドイツの国境駅バルネミュンデである。この駅を出ると再び列車は止まり、悪名高き東ドイツの出国管理が始まった。入念なパスポートチェックに始まり、座席の下から荷だな全部をチェックする徹底ぶりには、東ドイツのものは虫一匹も外には出さないと云うような意志が感じられた。東側に生まれなくて本当に良かったと思った。まさに収容所国家である。

30 分から 1 時間も停車したろうか、再び列車がゆっくり動き出しフェリーの中に入る。フェリーが出航すると、デッキに出て良い旨の放送がある。しばらくすると、もう夜明けである。フェリーのデッキでバルト海を眺める。夏なのに寒々している。緯度も高いし、紛れもない北の海なのである。鉛色の海。売店でコーヒーを買って、バルト海を眺めながらたたずむ。ハンガリー-チェコスロバキア-東ドイツの印象はかなり強烈であった。鉛色の海を見ながら、感慨にふけっていた。

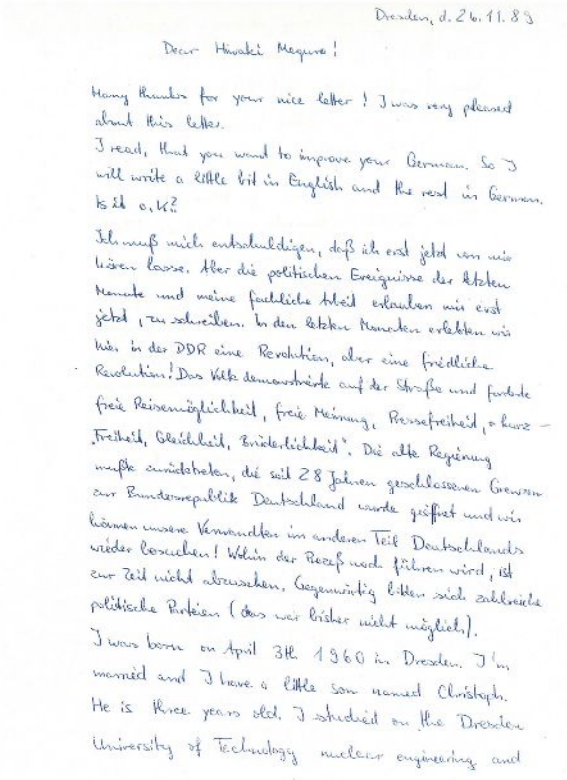
やがて、デンマークの陸地が見えてきた。車内に戻る。朝靄の中、デンマークの港ゲッサーに到着。再び、列車が船から出される。ディーゼル機関車が牽引する。気抜けするくらい小さな駅である。今までの出入国管理が厳しかったせいか、デンマークの入国管理は覚えていないくらいあっさりとしたものだった。そのうちに、ひげの車掌が検札にきた。私はゲッサーまでの切符しか持っていなかったので、いよいよユーレイルパスにサインしてもらうことにした。今日から使用開始である。21 日間有効のパスなので十分間に合うであろう。列車は徐々にスピードをあげ牧草地を疾走する。やはり、酪農の国である。

デンマークに着いたとたんに、気むずかしそうなおじさんが急に愛想が良くなった。聞きもしないのに、今日はコペンハーゲンの親戚に行くのだと、うれしそうに話してくれた。どこから来たのと聞くと、ブルガリアだそうだ。はるばるとおじさんはバルカン半島のはずれから列車でやってきたのだ。西側の国に入り、自由な雰囲気に気分がほぐれたのであろう。確かに私自身、ハンガリー、チェコスロバキア、東ドイツと旅行するにつれ、何とも言えない息苦しさを感じてきた。私も、再び西側の国にこれてうれしくなった。やがて列車は、小雨そぼ降るコペンハーゲン中央駅に滑り込んだ。今日から再び、西側諸国の旅が始まるのである。

東側で知り合いになった人々、カレル大学のチェスラフ、プラハのヤルダとおじさん。ドレスデンのマルコ・ステファン博士、彼らには帰国後、手紙を書いたし、チェスラフには、彼の希望通り日本の女の子を紹介したが、返事も何もなかった。私は、手紙を出すことが、彼らにひどい迷惑をかけることになるようないけないことだったのだろうかと後悔した。非常に悔やまれた。しかし、その年の 11 月から 12 月にかけて予想もしないことが起きた。崩れることなど思いもよらなかった、社会主義が崩壊し、その象徴のベルリンの壁が崩れた。チェコ、ハンガリー、ポーランド、東ドイツと堰を切ったように自由化の波が巻き起こった。

私は、この大きな出来事を固唾をのんで見守っていたが、そうこうした年の暮れ、マルコ・ステファン博士からは”返事を書けずに申し訳なかったが、ついに壁が崩れ、我々も自由になった”という喜びの手紙に、子供の写真が添えられ送られてきたし、チェスラフからはやはり紹介した女の子のもとに、やはり喜びの手紙が届いたとのことであった。

私は、この全世界をゆるがす、激動の波を肌で感じ取ることができたかと思うとこの幸運を神に感謝したくなった。



Dresden, d. 26.11.89

Dear Hiroaki Meguro!

Many thanks for your nice letter! I was very pleased about this letter.
I read, that you want to improve your German. So I will write a little bit in English and the rest in German. Is it o.k.?

Ich muß mich entschuldigen, daß ich erst jetzt von mir hören lasse. Aber die politischen Ereignisse der letzten Monate und meine familiäre Arbeit erlauben mir erst jetzt, zu schreiben. In den letzten Monaten erlebten wir hier in der DDR eine Revolution, aber eine friedliche Revolution! Das Volk demonstrierte auf der Straße und forderte freie Reisemöglichkeit, freie Meinung, Pressefreiheit, „kurz – Freiheit, Gleichheit, Brüderlichkeit". Die alte Regierung mußte zurücktreten, die seit 28 Jahren geschlossenen Grenzen zur Bundesrepublik Deutschland wurde geöffnet und wir können unsere Verwandten im anderen Teil Deutschlands wieder besuchen! Wohin der Prozeß noch führen wird, ist zur Zeit nicht abzusehen. Gegenwärtig bilden sich zahlreiche politische Parteien (das war bisher nicht möglich).

I was born on April 3th 1960 in Dresden. I'm married and I have a little son named Christoph. He is three years old. I studied on the Dresden University of Technology nuclear engineering and

（ドレスデン市、マルコ・ステファン博士からの手紙）